カレアを見送り、ヨシュアはテーアルご端切れと針を放 窓位ら掴める空幻青う登みきっていす。冬位やってうる り出し去。人間はお向き不向きというものなある。 ヨシェ なら、茶を新けれ自腸の数りを流しこむ。 「いやね、行ってくるは」 さかのお苦菜いずある。

Eシェて払渋か、猷具を受り取る、

午前中いっれい町種い間んであれば、カンでから返って

で託り

さきほどまでの陽気が嘘のように森は、冷え冷えとしてい ヨシュアは、さらに外れて森の薄闇へと足を踏み入れた。

屠所の羊

根のふき替えに忙しいのだろう。

村を一巡している道へ出た。誰もいない。みな集会所か屋

畑の土と堆肥が臭気を放っている。それらを抜ければ、

思いきり、戸外の空気を吸いこんだ。

6 掛巾

りそそぐ。足は痛むが、歩行を続けられないほどではなかっ

た。肩が無事な右手だけを上げ、伸びをする。ヨシュアは

前の穏やかな快晴である。ヨシュアは室内に飽き飽きし、

いる。

214

家の扉を押し開けた。途端に温かな日差しがヨシュアへ降

※を就き、 ひして お後を あく留めま。 「ことの避風、いば」

「自役の服金離えなんで式る大変ぎょ。 土手> 予考をよら コなで式る米 くしむを 達える は」

引いるこれで 画権して見せた。 条代等間嗣い 赤を貫通して **よしてお目をもなめ、後氏コネを重している。 結び目**お

6

うから蘇物の練習できしてて

「一人ジャ不自由

さらもが

というな。

退回

うさに

りは

こし

しい

これ

いっ

これ

に

いっ

に

いっ

に

いっ

いっ

に

いっ

に

いっ

に

いっ

に<br

その時、木々の間から黒い影が姿を現す。ヨシュアを突

きりと『1』、『4』と記されていた。

「かまかないけど」

ヨシュアの前い

温切れと

強、木綿糸が一本、並べられき。

明日、エリの家の量財をそき替える予定式とホレンお ここで、「多いっぱいヨシュトコ留守を預けるつきりらし

エリお、青白い随い微笑みを容伝がアいる。

らず、子供のままだった。 「うん。だから、もうああいうの飽きちゃった」 エリは、この村の最古参である。しかし、他の者と変わ

「どうして村の境を越えようとしたの?」

言い淀むヨシュアにエリは、首を傾げる。

「うん。赤い花が咲いてて。そこまで行きたかった」

鳴って入ってきさかしていヨシュアは、筋いた。

「いっかいないという国園里のよう

「おからら、からら」

エリは吹き出した。

ヨシェての言葉コエリお固う目をつむり、 頭を張る。 「あれん、ここに来る前にやっさことなんなと思う」

エリは目を置っていた。

「ーくる響 ームエベビ」

は村の境を守ってる。境を越えてくる怪物と争ってるのさ」 がいるんだ。ぼくたちを食べちゃうんだよ。それで犬たち 「きみって、なんだかすごいねえ。森には、恐ろしい怪物

れほどでもないと思うけど、どうかな?」 「肩を動かしちゃ駄目だよ。足は、固定したから痛みはそ 頭を掻こうとしたヨシュアは顔をしかめる。

伝われながらシャツに袖を通す。袖のボタンを留めていた 肩と足に包帯を巻いたヨシュアは満身創痍だ。エリに手

とうとうないないは、はくは、ないならないはっちいいし

エリの値を沿山まった。

ヨシェアき自分の掌い帰られた数字を眺める。

「きあお夢を見る?」

ころが

だ。この材は、両なのかって「

る。振り返ったヨシュアの目に天へと続く柱が輝いていた。

森の奥へと歩んでいく。 中央の広場に屹立している透明な筒である。 故のない恐れがヨシュアを苛んだ。慌てて目を逸らし

海お四兄忠行、本長お憂いEシェての三部おある。 1ま

長、行大きく劉靖し、計量を引る対職等。

野の端で赤い花びらが揺れている。ヨシュアは思わず、身 ないよう注意しつつ、木々で狭まる風景に目をやった。視 ヨシュアの前に村の境を表す石が並べられている。越え

> しているはわできな你に式。大式さな林の宅鸛を貼にてい へ向むている。しかし、増む急っておおらず、歯をむき出

。 いつら 手料料の ひずらいろめ

ヨシェアお箸を窓襲りつけき。

「間域ひ! クタバレ!

プログロを目のらばいないとが順、原を用が、 観を目に

を飛割し、増みな説點お貼いやにす。大』針にす。

校をるエじお、掌をEぐェての前へ気わる。 大きうおこ

その様子を眺めていたヨシュてが尋ける。 薄荷の香りが 塗り薬の容器から 放されていた。 「きみね人らなくていいの?」

預じらす。 よういいけくば、まま」

なっている。ひしてささむ、屋財のそき替えいついて簫舗 集会所の一角でヨシュアな、手当てを受けていた。 常屋

災難がこれは一

くる。ヨシュアは周囲を見回した。 湿った森の空気の中を苔に混じって、甘い香りが漂って

アの足は香りの行方を追いかけた。だが、赤い花を見たと 思った途端、地面に叩きつけられる。ヨシュアは肩の痛み 「足元に気を配って。意外なところに生えてるんだから」 身を屈め、カレブはキノコの採集に夢中である。ヨシュ

に悲鳴を上げた。 「ヨシュア!」

り声に二人の耳は聾された。牙をむき出した獣が二人から 倒れているヨシュアにカレブがかけ寄る。恐ろしいうな

カレアに囲む国こされ、ヨシェアは材へと見らた。 羊の海暑

「あーあ。 林嶽 3 言い こりら けき かこ 式は。 ア き、 大大夫 ややアロから光を発し、その掛ね、真面やい空を置く。 いる人針もと帰風なほほなないから

ころみ、 ヨシュト。 光7言ってはわば身からた。 林の顔 **体ら出去ら類目な人学。大きさお、割くら多守ってくけて** ヨシュアは目を置った。

少し離れ、赤い目でこちらを睨んでいる。

をひねったらしく、まともに歩くことはできない。 「駄目だよ。動いちゃ。じっとしてて。どうせあそこから ヨシュアは立ち上がりざま、苦痛に悪態を吐いた。足首

入ってこれない」

天へ口を開き、遠吠えを始める。 残った目をヨシュアへ向けていた。しかし、次の瞬間には いる獣の片目は潰れている。顔を曲げるようにして傾け 土の上に石が並んでいた。その外側から身をのり出して

ン、楠樹暖様(@kusunokidan)の作成図を使用して います